

河野稔果・大淵寛編

『人口と文明のゆくえ』
(シリーズ・人口学研究12)

大明堂 2002年 viii + 288pp.

かね きよ ひろ ゆき
兼 清 弘 之

本書の構成

人口変動と文明の相互関係を論じた本書は、人口学研究会が共同研究の成果を毎年のように公刊しているシリーズの最新巻である。人口という特殊な視点から文明のゆくえを展望している点で、多くの文明論と異なるユニークな研究書である。それと同時に、一般の人々も大いに関心をもつであろう諸問題をわかりやすく解説しており、広く読まれる著作であろう。

各章の題名をみるとわかるように、気宇壮大な構想である。500万年前のヒトの出現から説きおこして、文明の進歩と世界人口の増加のあり様を明らかにし、さまざまな問題点を指摘しながら、論議は「人類と文明のゆくえ」に及んでいる。それぞれの分野の専門家が分担執筆して、次のような構成になっている。

- 第1章 人口の波・文明の波（大淵寛）
- 第2章 経済社会システムの転換と人口変動（鬼頭宏）
- 第3章 飢餓・疾病・災害と文明の対応（西川由比子）
- 第4章 人口移動・都市化と文明の盛衰（森岡仁）
- 第5章 家族変動とそのゆくえ（阿藤誠）
- 第6章 現代文明と女性のエンパワーメント（佐藤龍三郎）
- 第7章 少子・高齢化の文明史的意義（嵯峨座晴夫）
- 第8章 文明の衝突の人口学的考察（岡崎陽一）

- 第9章 人口変動と地球環境の変化（加藤久和）
- 第10章 成長の限界と世界人口の将来（井上俊一）
- 第11章 人類と文明のゆくえ（河野稔果）

各章の概要

各章の内容をかいつまんで紹介し、気づいた点を若干指摘しよう。

第1章でまず文明の概念について論じ、人類が獲得してきた「すべての知識、制度、慣習、技術などを含めた価値の総体」（4ページ）が文明であると定義している。非常に広義の概念規定であるから、第2章以下の執筆者はそれぞれの章で特有の観点から、人口と文明を論じることができるのである。

さて、この章のテーマである人口の波と文明の波の関係は文明の波が「ほとんどつねに人口の波を引き起こしてきた。……人口の波が文明の波を惹起した」（7ページ）という。文明は多様であり人口の波に中立的な文明の進展もあるはずであるが「人口増加の積極的役割を重視し、人口増加を歴史発展の動因とみなす」（21～22ページ）ひとつの歴史観が人口史観である。それは「人類史や文明史との関連を考究するとき、そのすぐれて長期的、動態的な本質がますます精彩を放つのであり、人口研究のフロンティアとしてより一層重要性を高めるであろう」（22ページ）と説明されている。

第2章は、経済社会システムの転換と人口変動の関係を歴史的に考察しているが、「文明の人口支持力」を重視している。人口の波動についての論議は第1章とかなり重複する。現代日本の人口現象を「人口文明学」（39ページ）の視点から考察する必要があるということであるが、人口文明学とはどのような学問なのであろうか。それは社会科学なのか、自然科学をも含む総合的な科学なのか。十分な説明をみつけることはできなかったが、人口史観による文明研究と理解すればよいと思う。

第3章は、飢饉・疾病・災害をとりあげて、文明がどのように対応してきたかを概観している。この章も石器時代から話が始まる。そして文明の定義がなされ、飢饉の歴史と型の分類がなされている。さ

らに、環境の変化に対する文明の勝利と敗北を検証することも有意義であろう。

第4章では、人口都市化と文明の関係を論じている。都市化の初期段階は、人口の自然増加に不利な状況にあり、外部からの流入によって都市人口が維持されていた。それでも、都市は文明の「盛」をもたらしたという。では、文明の「衰」と都市の関係はどうであったのか、これも重要な研究課題であろう。

第5章では、現代の家族変動を考察している。人口転換（人口動態率が高出生率・高死亡率〔多産多死〕状態から低出生率・低死亡率〔少産少死〕状態に移行する過程）前の社会では、概して大家族が支配的であったが、新しい家族観（情緒的核家族化）が出生力転換の要因となったことが指摘されている。未婚化、晩婚化、晩産化、パラサイト・シングル、単身赴任の家族関係、家族をもたない高齢者の増加など、家族の形態と人間関係の多様化が、現代社会の特徴であるという。

第6章で論じるのは、女性のエンパワーメントという新しい研究課題である。戦後、女性の社会的地位向上を目指して、国連憲章（1945年）、世界人権宣言（1948年）、国際女性年と第1回世界女性会議（1975年）、国連女性の10年（1975～85年）など、国際的な運動が展開された。

こうして、フェミニズムないしジェンダー論が発展した。ジェンダー・フリー社会を理想として男性優位の文明からの脱却が希求されているが、女性のエンパワーメントは「男女の力関係に変更を迫るものであり、それによって地位が脅かされると感じる男性」（129ページ）も多いことであろう。しかし「エンパワーメントは必ずしもゼロ・サムゲームを意味せず、大局的にみれば男女をともに利する」（129ページ）という考えもある。

さらに、日本におけるジェンダー革命と出生力の分析を行っている。女性の高学歴化や雇用機会の拡大など『女性の社会進出』が、女性にとってのシングル生活の相対的メリットを高め、結婚生活の相対的メリットを低下させた」（142ページ）ことが出生力低下の原因であるとする「フェミニズム仮説」

を支持しながらも、「出生力パターンの差違を職場や家庭におけるジェンダーの平等・公平の達成度の違いのみに帰すわけにはゆかない」（143ページ）として、包括的な研究の必要性を強調している。

第7章では少子・高齢化の問題をとりあげている。キケロやボーヴォワールなどの「老い」の学説が紹介され、わかりやすい論述である。「人は死を無視することのできるかぎり、その老境においても青年よりも大胆に行動できるし、元気でもある」（151ページ）という。しかし、高齢者の価値観と若年者の価値観が大きく異なることは明らかであり、少子高齢化社会の問題の多くが両者の対立からおこっているとも考えられる。

少子化と高齢化は、近代化の副産物としての「個人主義」によっておこされたものである。したがって「個人と集団のあり方にまで立ちかえって、低出生と人口減少に人為が及ぶような枠組みの構築が現代文明に求められている」（175ページ）のである。

第8章は、文明の衝突の人口学的考察である。文明の衝突と人口に関しては、文明の衝突（戦争など）が人口に及ぼした影響と人口増加が文明の衝突を引き起こす可能性の両側面が、これまでにさまざまな著作で論じられてきたが、本書のこの章では「ハンチントンの文明の定義に即して宗教をベースに文明を分類」（182ページ）して、文明別にみた人口分布、人口動態、そして人口転換の考察をしている。

この章は文明の衝突を直接論じるのではなく、文明グループ別の人口問題を分析する控えめな論述になっている。

第9章は、地球環境の変化に論点をしぼり、文明の衝突や文明のゆくえを直接とりあげてはいないが、環境と人口を論じるうちに文明のゆくえが環境問題にかかっているという結論に到達している。

食料、エネルギー、温暖化問題などへの対応をめぐる先進国と途上国の対立があり、環境問題が局地的な公害問題でなく地球規模の問題になると、政策的対応がきわめて難しい現実が指摘されている。

第10章は成長の限界との関連を考えながら、世界人口の将来予測を紹介している。将来人口は地球の人口扶養力に依存するが、「今後の人口増加が世界

の一部の地域に集中的に発生する」(225ページ)とところに問題があるという。この章の論議は、第9章で論じた環境問題および持続可能な発展と深く関連する部分がある。

第11章は、人類と文明のゆくえを展望している。これまでの多くの章で、文明の発達が生産の消費と人口の増加をもたらす、成長の限界が目前に迫っていることを指摘しているが、この章では「文明が発達した段階で人間の生殖活動、家族形成活動に齟齬が生じ、出生率が置き換え水準以下に低下して人口が減少する現象、そして人口の衰退が文明を衰退させる可能性の可否」(252ページ)を論じている点がユニークである。

現在の低出生現象が、正常な状況からの逸脱なのか、新しい安定に達した正常な状況なのかをめぐっての見解を紹介し、「日本における出生率回復の条件」を提示している。多くの人の関心事であろう。

わが国の政府は「出生増進政策 pro-natalist policy の旗を公然と振るまでには踏み切れない事情」(272ページ)がある。そこで、「子どもは人生最大の宝であり、子どもを産み育てることは人生に至福の充実感を与えるし、またそれ自身最高の自己実現そのものである」といったイメージ、メッセージがもっとマスメディアによって伝播されてもよいのではないだろうか」(275ページ)と、この章の筆者は主張している。

途上国の人口と文明

本書の論述は多岐にわたるが、とくに開発途上国の人口と経済に關係する側面をとりあげてみよう。

1. 人口爆発

2000年の世界人口は60億であるが、1950年には25億だったので、20世紀後半の50年間に世界人口は35億も増加したのである。このような人口の急増が人口爆発とよばれており、本書の多くの章に、これに關係する論述がある。

世界人口の急増には、開発途上国が大きくあずかっており、人口増加の原因は貧しさにあるといわれてきた。「1人当たり GNP の水準により世界各国

をグループ分けして、1人当たり所得と人口動態を比較してみると、もっとも豊かなグループでは、出生率、死亡率はともに低く、自然増加率は1%を下回る低い水準にある。これに対して1人当たり所得が最低の最貧グループでは出生率、死亡率ともに非常に高い水準にあり、しかも人口増加率は年3%に近い。各国の所得水準による格差は、出生率でより大きく、死亡率ではさほどではない」(33ページ)。こうして貧しい国の人口増加率が高いのである。

もちろん、出生率が高くて死亡率が高ければ人口は増加しない。途上国で人口爆発がおこっているのは、死亡率が低下したからであり、それは文明の進歩の一面である。やがて出生率も低下して近代的な人口動態が実現するとしても、その転換が完了するまでの「過渡的な現象」として、途上国の人口は急増するのである。

最近になって、途上国の人口増加率も減速しはじめ、21世紀の半ばには開発途上地域の出生率も置換水準の近辺まで低下して人口急増現象は終息すると予測されている。しかし、その時点で現在の開発途上地域の人口が世界人口の90%をしめることになる。その結果、人口問題や経済問題は「発展途上国、なかでも人口増加の激しい最貧国を中心とする地域で顕在化する」(230ページ)ことになる。

2. 成長の限界

成長の限界が唱えられて久しい。30年ほど前に、ローマクラブが警鐘をならした。このまま世界の人口が増加し続けたり経済が成長し続けたりすると「21世紀中葉に資源の枯渇、工業および食料生産の崩壊、環境の悪化が顕在化して、人口も激減する」(228ページ)という危機的状況の可能性を指摘した。

この問題に関して、本書の第1章、第9章、第10章がそれぞれの視点からとりあげている。

第1章では「現代文明は経済発展・資源消費・環境汚染のトリレンマに陥っているのであり、人類は豊かさの頂点に立ちながら、苦悩している」(18ページ)と現状を認識し、この状況を打開する方策は「人口増加の抑制と省資源(エネルギー効率の改善)に尽きる」(19ページ)と主張している。

第9章では、人口変動と環境問題の關係を考察し

ている。文明の進歩は工業技術を発展させ、その恩恵に浴して豊かな暮らしをするために、われわれは大量のエネルギーを消費し、その大部分を化石燃料に頼っている。したがって、先進工業国の人々の豊かな生活が地球温暖化その他の環境破壊の元凶であると考えられている。しかし、「増加する人口を扶養するため、発展途上国などでは森林からの資源採取や焼畑農業などによって、毎年相当規模の熱帯林が地表から消失している」(198ページ)現象も無視できない。

要するに、「文明の進歩と人口の増加が地球環境問題を顕在化させ、現在に生きるわれわれ人類はこの問題を避けてとおることはできない」(214ページ)のであるが、こまったことに「地球環境問題の解決策に関する先進国と途上国の対立」(217ページ)がおこっている。

第10章では、人口増加と成長の限界を論議するときに、地球社会全体の視点だけでなく「現実的な個別の国や地域における成長の限界」に注目する必要がある、「それは現在、先進国と発展途上国間の格差という単純な図式では収まりのつかない複雑な様相」(221ページ)を呈しているという。世界の一部の地域、具体的にはアフリカ大陸で人口増加が集中的に発生し、「現在のアフリカの人口は世界人口の11%をしめるが、今後50年間で増加分の37%を引き受けることになる」(225ページ)と予測されている。

このような人口の将来予測をするにあたって重大な問題は、人口増加を可能にする人口扶養力をどう予測するかである。物理的・技術的に可能な最大限の食糧生産の計算ではなく、生産力を実現する経済組織や社会体制の発展をどう予測するかが重要な問題である。まさに「文明のゆくえ」を考えることなしに、人口問題を論じることはできないのである。

ローマクラブのレポート「成長の限界」は、「人口や経済を取り巻く環境や資源等さまざまな要因をとりあげてコンピュータシミュレーションを行い、諸要因間の相互関係を検証している。これはそれ以

前の諸研究と比べるとより現実の世界に近い分析になったといえるが、そこでも人口と経済活動を取り巻く政治・社会・文化的要因は考察の外におかれている」(228ページ)のである。「地球の人口扶養力は文明の質とそのダイナミズムによって決定的な影響を受ける」(231ページ)という視点から、人口の増加と経済の成長の限界を論じることの意義は大きい。

おわりに

ユニークな文明論である本書は、人口の視点から文明を論じるという特殊性を有するとともに、その論究は広い領域に及んで、興味つきない文明物語を展開している。「これまで論じられて来た文明論は、人口問題あるいは人口変動の要因、視点が欠落しており、議論の展開が十分でなかった」ので、「そのギャップを埋めること」(iページ)に本書の意義があると編者はその意図を語っている。文明論にとってこのような学際的なアプローチは有意義であるし、また人口学の新しい研究領域を拓く試みとしても興味深い。

文明の定義が広いのはよいが、文明の定義が各章に出てくるのが若干気になる点である。とくに第1章、第2章、第3章、第4章、第8章で、それぞれに文明の定義に関する叙述があり、重複のきらいがある。もちろん、各章を別個に読む読者には解りやすく親切ということにもなる。

文明を広義に定義すると、宗教や倫理もその一側面であり、人口問題と深く関係する部分がある。また、産児調節に関する人々の考え方や行動、社会的な対応としての人口政策も、重要な研究課題であろう。はしがきで「現在の文明社会にとって、人口倫理というものが必要になってくるのであろうか」(iiページ)と問題を提起している。宗教や倫理に関する独立の章があってもよかったと思う。

(明治大学政治経済学部教授)